

ジョン・グレゴリー (1724-1773) の業績紹介

松 家 次 朗

以下は、英語圏において初めて「哲学的、世俗的、臨床的医療倫理学を著した」John Gregory の業績の紹介である。¹ 彼の業績の本格的な評価は別の機会に譲るとして、今回は彼が医療倫理学あるいは医学の哲学（当時医療倫理学というような用語はまだ存在しなかった。この言葉を初めて用いたのは、1803年に Thomas Percival (1740-1804) が自らの著作に表題として付けた Medical Ethics が最初である。）を体系的に論じた講義のうちから第 1 講義の翻訳を中心に、彼の歴史的な位置づけをよりよく理解してもらえるようにと簡単な履歴と著作のごく簡単なリストを紹介するものである。

1. ジョン・グレゴリーの履歴

ジョン・グレゴリー (John Gregory) は1724年6月3日スコットランドに生まれる。彼の家系は数多くのすぐれた数学者や医学者を輩出したスコットランドの著名な家系である。父ジェイムズ・グレゴリー (James Gregory) は、アバディーン (Aberdeen) 大学の King's College の医学の教授で、学寮長も務めた。異母兄弟の長男はこの父の跡を継ぎ、後に長男の死去後ジョンが継ぐことになる。従弟にはコモン・センスの哲学で著名なトーマス・リード (Thomas Reid, 1710-1796) がいて、ともに最盛期のスコットランド啓蒙運動を推進する担い手となる。ジョンの正規の教育は、Aberdeen Grammar

* 2011年12月20日受理。

School で始まり、先の King's College へと続くことになる。キングズ・カレッジでは、ラテン語、ギリシャ語、倫理学、数学、自然哲学を学んだ。1742年キングズ・カレッジから Edinburgh 大学へ移り、本格的に医学の勉強を始める。当時のスコットランドの各大学（エディンバラ、グラスゴー、アバディーン）は、停滞気味であったイングランドのオックスブリッジよりも活気を呈しており、すぐれた学者を多数擁していた。特にエディンバラ大学はメディカル・スクールで名声を博しており、グレゴリーはそこで、モンロー一世（Monro primus）の解剖学、シンクレア（Sinclair）の医学理論、ラザフォード（Rutherford）の医学実践の各講義に出席した。ラザフォードは Royal Infirmary で医学生の実践教育のために教育病棟を始めるのに貢献した一人であった。他に、アルストン（Alston）の *materia medica*（治療薬大全といったもの）と植物学を、さらにプラマー（Plummer）の化学を聴講した。

1745年彼は、当時の多くの若者と同様、ライデン大学に留学し、医学研究を続けた。1746年6月3日、前記のキングズ・カレッジの哲学の教授に選出される。1749年退職し、ヨーロッパ大陸の諸都市を巡る旅に出る。1752年 William Lord Forbes の娘 Elisabeth と結婚。1754年にロンドンに出て、念願の開業医となる。同年、the Queen of the Bluestockings（平塚雷鳥らの青鞥派と機関誌『青鞥』はこれに因む）として知られる Elizabeth Montagu と知り合い、そのクラブ the Bluestocking Circle に出入りするようになり生涯の友となる。同年 the Royal Society of London のフェローに選出される。1754年、上記の異母兄弟のジェイムズが死去したため、彼のキングズ・カレッジのポストを継ぐことになり、帰国する。従弟のトーマス・リードや他の人たちとともに、the Aberdeen Philosophical Society を立ち上げ、スコットランド啓蒙運動に大きな貢献をすることになる。1766年、ラザフォードの後任（Professor of the Practice of Physic）としてエディンバラ大学に移る。同時に his Majesty for Scotland の最初の医師（physician）となる。同僚に William Cullen（1710-90）

がいた。1770年エディンバラ大学での講義をもとに *Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician* を出版する。1772年増補改訂版が出された。今回翻訳紹介するのはこの著作である。1773年2月9日死去。死因は痛風とされる。

2. 翻訳の著作について

グレゴリーが生涯に出版した主要な著作は3冊である。最初の著作は、1765年に出された *A Comparative View of the State and Faculties of Man with those of Animal World* である。最初匿名で出され（当時よくなされた習慣である）、評判の良かった著作で、彼の名を一躍広めた処女作である。第2作が今回紹介する1770年に出された *Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician* である。第2版が1772年に刊行され、英国だけでなく、ヨーロッパやアメリカにおいても18世紀の末から19世紀にかけて広く影響を与えた著作で、現在ドイツ語訳、フランス語訳、イタリア語訳が知られている（いずれも18世紀末のものである）。最後のものは、彼の死の前年に彼の娘たちに書き残した *A Father's Legacy to His Daughters* である。1774年の死後出版である。その他に1772年に出版された *Elements of the Practice of Physic: For the Use of Students* があり、また、マニュスクリプトと手紙、さらに講義の受講生によるノートが残されている。主要著作は、1788年に *The Works of the late John Gregory, M. D.* 4vols. としてまとめられている。この著作集の第1巻にはグレゴリーの親友の一人 A. F. Tytler によるジョン・グレゴリー博士の生涯と著作に関する説明が付け加えられている。現在この著作集は、ECCO (=Eighteenth Century Collections Online) Print Editions として入手が可能となっている。今回の翻訳の底本にはこの著作集の第3巻所収のものを使用した。現代の版としては Laurence B. McCullough の *John Gregory's Writings on*

Medical Ethics and Philosophy of Medicine (Kluwer Academic Publishers, 1998) に収められているものがある。今回の翻訳にあたってはこの版も参照した。²

3. 翻訳

[底本： *The works of the late John Gregory, M. D.* 4 Volumes (1788年)
Volume 3: *Lectures on the Duties and Qualifications of a Physician* (1772)]

医師の義務と資格にかんする講義

第1 講義

[医学技術 medical art の効用と尊さ]

この大学 [エディンバラ大学のこと] で私が保持する光栄に浴している職業 (profession) の目的 (design) は、「医学の実践」、すなわち、それによって私が理解するところの、健康を維持し、命を長らえさせ、病気を治す技術を説明することである。これは広大な領域と重要性を持った技術である。そしてあなた方がこれまで受けてきた医学に関する勉学はすべて、あなた方をこの技術に対して適任とするよう意図されていたのである。

しかし、私は、本講義の議題に入る前に、慣習に従って、若干の予備的な講義を行うことにする。これらの講義において私は、厳密に言えば私の科目に属してはいないけれども、しかし、医学を実践しようとするすべての人の注目に値するいくつかの考慮すべき事柄をあなた方に示すことにする。ここでは医学技術の有用性と尊さについてくどくどと述べる必要はないと私は考える。その有用性については、決して真剣に疑問に付されることはなかった。痛みと病 (sickness) に苦しむ人はすべて、彼に安らぎを与える技術の有用性を心から

よろこんで認めるであろう。確かに人々は、医学的処置（physic）が全体として人類に対してより役立つのかあるいはより有害なのかについて議論するかもしれない。ちょうど人々が、理性の能力がしばしば悪用されるのを考慮して、それが実際に人間の生活をより幸福にするのに貢献しているのか、あるいはより少なく幸福にすることに貢献するのかどうかと、また、頑健な体質や働かずに暮らせるだけの財産が、それらを所有する人々にとって恵みなのか災いなのかと、また、技芸や科学が一般に人類にとって有益なのかそれとも有害と証明されているのかと議論する場合と同様である。このような問いは、弁舌の才を披露し、もっともらしいことや機知に富んだことをいう好機を提供する。それでもなおかし、そういった獲得物がそれらの本性に従った本来の使用目的に適用されるのであれば、それらにともなう本当の実質的利益を疑う者はだれもいない。

[医師が時に諧謔 ridicule にさらされてきた理由]

確かにあらゆる時代において多くの諧謔が我々の職業に対して向けられてきた。しかし、結局のところ、こういった冷やかしも医学的処置に対してというよりはむしろ医師（physicians）に対して使用されてきたということを我々は見いだすだろう。これには十分に明らかな理由がある。医学を職業として生計を立てている人々の団体とみなせば、医師たちにはこの学（医学）の名誉とは異なる、はっきり区別される利害関心がある。この利害を追求するに際して、誠実さ（candour）、道義心（honour）、紳士のおおらかでとらわれない態度をもって行動した人たちもいた。自ら自身の価値を自覚して、あらゆる策略を軽蔑し、成功のために、自らの本当の価値（merit）を恃んだ人たちもいた。しかしそういう人々は、どのような職業にあっても多数ではない。ある人たちは必要に迫られ、またある人たちは虚栄心に刺激され、また他の人たちは無知を隠そうと切に願って、常に人類の大多数である無学な人々の中で自らの威信を

高めるために様々なさもししい、下劣な手段に頼った。こういった手段の中のあるものは、彼らの書き物や会話のすべてに見られる、彼らの職業に関連する神秘性に対する愛着であった。すなわち、この学問の熟達者以外のすべての人々には計り知れない知識に対する愛着であり、彼ら自身の技術と能力に対する完全な信頼にあふれた様子であり、もったいぶった、軽蔑的な、尊大さを強く表現した態度である。こういった手段は、それらが人類の他の人々に対してどんなに成功を収めようと、より思慮分別ある人々の譴責を免れなかったし、諧謔やユーモアをもった人々の冷やかしを逃れることはできなかった。特に演劇は病を癒す技をもつプロフェッサーたちに対して辛辣な態度をとった。しかし、ほとんどの風刺劇は個々人の特定の見解あるいは態度に向けられているのであって、その学問そのものに対して向けられているのではないことは明白である。

【医師の特性を形成するうえで必要とされるもの】

その職業の尊さについて私にはいう必要はほとんどない。皆さんが尊敬に値する職業を選択したことに十分満足していると私は思っている。若干の国々の誇りだったのかそれとも気まぐれの思いつきだったのかはともかく、それは一般にもっとも教養ある（liberal）職業の一つとみされてきたのも、十分に理由のあることである。その職業に秀でるには、他のどの職業において必要とされるより大きな領域の学問が必要である。数学の知識、少なくともその基礎部分の知識、自然史や自然哲学の知識は、その職業と本質的に結びついている。同様にその職業の基礎である解剖学、植物学、化学といった学問とも本質的な関係を持っている。同じように医学の実践を上首尾に果たす上で必ずしも絶対的に必要ではないけれども、正規の教育を受けた医師で、それらを身につけていないものは見かけないほど利用価値のある知識の分野がある。すなわち、ラテン語、ギリシャ語、フランス語についての心得である。もし皆さんが以上のこ

とに人間に関する知識と、医師が人々との広範にわたる交際によって自然に無意識のうちに獲得する態度（manners）を付け加えるならば、いかなる職業も医師という職業（that of physic）より以上に多様な教養としての学問的（liberal）達成を必要とするものはないということが明白になると私は思う。その職業の尊さを確立するのに以上のことだけで十分である。つまり、それが、人々にとってのその本当の有用性によって、また、それを上首尾にそして信望をもって実践するに必要な多様な才能によって評価されるべき場合のその職業の尊さのことを私は言っているのである。

[医学という職業が才能と人間らしい思いやりを発揮するために提供するもう一つの機会]

私たちは、私たちの職業が英国の領土（British dominions）のあらゆるところで敬意をもってみられていることに喜びを感じるのも当然である。ヨーロッパの他の国々でその職業のいくつかの部門がいかに軽蔑的に見られているかを知っている人々は、ここ英国でそれらに払われている正当な評価をより賢明なものと感じるであろう。他の多くの中で、このことから結果する、一つの幸福な帰結は、気概と才能の点で際立っている最良の家族の紳士たちがしばしば医学の研究に志願することであり、そして、一般に良き生まれの洗練された教育を受けたものに見られる、おおらかでとらわれない態度が、さらなる尊さをその職業にもたらしていることである。

医学という学問の有用性と尊さの一般的考察の他に、それは二つの異なる視点において考察されるだろう。

第一は、天賦の才能（genius）を発揮するためのきわめて広大な分野を提示しているものとしての医学である。主題の規模の大きさと様々な原因（これについては、私はのちに説明を試みるつもりである）によって、その多くの部分において医学は不完全な状態に残されたままである。それどころか、その中に

はこれまで探求されてこなかった部分も存在するのである。

第二に、医学は人間愛（humanity）を遂行するためにも同様に広大な分野を提示する。医師には、苦しみ（distress）に対して、インドの富によっては購うことのできないあの安らぎを与える数え切れない機会がある。これは善意の心を持った人にとっては、最大の喜びの一つであるに違いない。しかし、医師が自らの力においてしばしばなしうる善の他に、彼の職業に属する技能（skill）のゆえに、人間としての、彼と同類の被造物の不幸な出来事を思いやる人としての、彼の援助を必要とする多くの機会が存在する。この点において彼には、忍耐、親切心、寛容、共感、そして人間性に名誉を付け加えるより思いやりのある徳のすべてを示す多くの機会がある。この団体（faculty）は、彼らが人間の悲惨さにまさに精通していることによって引き起こされる（と想定されている）心の固さゆえにしばしば非難されてきた。私としては、このような非難が不当であると望んでもいるし、信じている。というのは、習慣というものが気性を統御する力や、よく絶対的な冷淡さと誤解される外見上の落ち着きを生み出すことがあるからである。ところで、しかし、この冷淡さ（insensibility）が現実のものであるときには、それは医師にとっての不幸であると私は言わざるを得ない。それは、自分の患者の救済に献身しようとする最も自然で最も力強い誘因の一つを彼から奪うからである。他方、あまりにも感じやすい医師は、不安と共感の過剰から自らの義務の遂行を不可能にされることがある。それらは、彼の理解力を曇らせ、彼の心を抑圧し、おそらく自らの患者の生命が大きく依存しているあの沈着冷静さと活力をもって彼が行動することを妨げるからである。

[医師の義務と職務（offices）の探求]

以上のことから私は自然に医師の義務と職務について述べるように導かれる。これは非常に重要ではあるが、しかしおそらくその職業の一員が、当然そ

うあるべき自由さをもって、それを取り扱うことを困難にするほど非常に取り扱いの難しい性質の課題である。しかし、私はそれをなんらの遠慮もなくやってみるつもりである。人を全く憤慨させないような仕方での課題を取り扱うことの困難さは、医学が人類にとって最も有益で重要な技術（art）とみなされる場合もあれば、かなりの数の人々がそれによって生活の手段を得ている生業（trade）とみなされる場合もあるというところから生じている。これら二つの見方は明瞭に区別されるにもかかわらず、両立不可能では全くない。むしろ実際にはそれら二つの見方は、あまりにしばしば両立不可能であるとされているけれども。私はこの問題を次のような視点から見ることにする。すなわち、医師において、彼の技術の進歩に最も資する行為の体系とは、その職業の真の尊厳と名誉を最も効果的に維持し、そしてその職業の中で、本当の能力と良さ（merit）とをもった人々の個人的な利益をも促進するようなものだという視点である。私はこのような課題を皆さんのような年齢の紳士の前で論ずることを、皆さんがかりにさらに数年の年齢を重ねていた場合ほど心配してはいない。青春とはまさしく、自由、寛大さ、公平さといった感情が心への道筋を最もたやすく見出す時期である。それらの感情がそのとき心に達することがなければ、その後それらがそこに達することは決してないであろう。確かに年齢は知識と経験の増加によって理解力を向上させるかもしれない。同時に一方で、本当にしばしば判断力を間違った方向に導く気性と想像力のあの熱は徐々に衰える。しかし、不幸にして、ある点では理解力を向上させ、他の点では天賦の才を意気消沈させる、まさに人生の下り坂にともなうこの状況が、科学と真理の熱烈な追究を抑制し、すべての雄々しく、気宇壮大で、おおらかな感情に対して心を閉ざしてしまうことが起こる。

[この課題の分割]

以上の課題を遂行するに際して、私は第一に、どのような種類の天賦の才、

理解力、気質が人を自然に医師となるにふさわしいものにするのかを考察する。第二に、彼の職業を実行するに際して彼から期待されるべき道徳的特質とは何か、すなわち、彼が患者に対して必要とする、人類に対する責任感、忍耐力、注意力、思慮深さ（discretion）、秘密保持（secrecy）、信義（honour）について考察する。第三に、医師としての彼が特に義務とすべき、そしてまた最も効果的にその職業の尊厳を支えるように思われる、エチケット（decorums）と気遣い（attentions）に注目する。そして同様に、彼の礼儀作法の一般的な適切さとして、彼の患者や仲間や外科医や薬剤師（apothecaries）に対する彼の態度にも注意を向ける。第四に、特に医師を成功と評判をもって診療するにふさわしいものにするのに必要な教育課程について述べる。そして同時に、教養教育（a liberal education）を受けた紳士としての医師から期待される、そしてまたそれなくしてその職業の信義と地位を支えるのが難しいあの人に光彩を与える資格に言及する。

〔医師に求められる天賦の才と理解力と気性〕

私は、人を自然に医師となるにふさわしいものにする天賦の才と理解力と気性から始めることにする。

おそらく医学ほど包括的な知力を必要とする職業はないであろう。学的体系とみなされている他の知的職業には、一定の確立された基準、一定の確固たる法律と法令が存在する。あらゆる問題は常にそれらに照会され、それらによって判定されなければならない。このような確立された権威に関する知識は、たゆみない適用と記憶の良さによって獲得されるだろう。そこでは天賦の才を発揮する余地はほとんど残されてなく、発明の才が付け加わることもできなければ、判断力が改善されることもできない。なぜなら、確立された法律というのは、それらが正しいものであろうが間違ったものであろうが、従わざるを得ないからである。独創性の才が唯一働かせるのは、法律が何であるかが明瞭に

見えない場合である。しかしその場合ですら、議論の余地がある点は判定者の決定に委ねられなければならないが、判定者の見解は、様々な状況の組み合わせから作られるので、しばしば異なるのだから、それによって独創的な推論者かどうかを判断しうる基準は存在しない。そしてまた彼の結論も、それらが正しく得られていようと間違っ得られていようと、なお未決定のままにとどまらざるを得ない。医学の場合には事情は非常に異なる。そこではわれわれは疑わしい場合にわれわれが拠る所とすることのできる確立された権威を持っていない。すべての医師は、その正確さを自然と経験のみに訴える彼自身の判断に頼らざるを得ない。教養教育の課程で彼の記憶に満たされた無限に多様な事実と理論の中で、彼がしなければならないことは、自然と経験に基礎づけられるものと、無知、まやかし、あるいは興奮させられ誑かされた想像力の気まぐれな体系によって生み出されるものとを慎重に分けることである。同じように彼は、重要な事実と、真理に基礎を置いているとはいえ彼の職業の主要な目的にとっては取るに足らないあるいはまったく役立たないようなものとを区別することも必要なことだとみなすであろう。こういったすべての困難が克服されたと考えたとしても、彼は自分の知識を診療に適応することは容易な事柄ではないとみなすだろう。診療行為（practice of physic）の体系を教える際、すべての病気（disease）は個々別々に、そしてそれ自体で存在するものとして考察されなければならない。しかし実際には、病気というものはこれまでいかなる体系も理解することができなかったほど無限の種類があって複雑だとみなされている。このことが若き診療者に困惑を引き起こす。この困惑は、精密な識別の習慣、彼をして現実の類似を知覚させることを可能にする直観の素早さ、そしてこれと結びつくことはめったにないが、彼を想像的な類似によって欺かれることがないように守る判断の確実さ以外のものによっては取り除くことはできない。大いなる想像と若干の知識をもつ学生はこの困難に思い至らない。彼は思い上がった心において、すべての病気は彼の前に飛び出てくるに違いない

と想像する。かれはあらゆる病（distempers）の直接の原因と治療の指標を知っているだけでなく、そういった病に正確に役立つだろう様々な治療法をも知っていると考えている。しかしながら、少しの経験がこの高慢の鼻を折らず、そしてまた多くの場合、彼は直接の原因や治療の指標を知らないばかりか、こういった指標をまさに知っている場合でも、これらの指標への対処の仕方を知らないことがあるということを彼に納得させなければ、あるいは、同じように屈辱的なことではあるけれども、それらの指標は種々様々で矛盾するということを彼に示すことがなければ、それは彼の患者たちにとって不幸なことになるだろう。このような状況では、彼の自慢とする学問は、たぶんしばらくの間は、無用な傍観者になり下がるか、あるいは個別の症状（symptoms）の激しさを一次的に緩和するか、あるいはこの上ない不安と自信の無さという状態で、危なっかしい類推からかれが受け入れることのできるような手掛かりをもって進まざるをえないであろう。医師が彼の初期の診療において直面しなければならない困難とはこのようなものである。それらの困難を克服するためには、正規の教育という必要条件に加えて、物事を見抜く優れた才能、明晰で確固たる判断力、そしてさらに多くの場合には、[治療の] 成功の最大の可能性がどこにあるかを瞬時に知覚する理解の素早さ及びそれに応じて行為する決断の素早さの共働が必要である。

[気性の統制、沈着さ、決断力が必要である]

しかし、医師は私が今まさに記述したような拡大された医学的才能を所有しておくべきなのだが、他の種類の才能もまた求められる。医師は彼自身の精神の改善を目的として持つだけでなく、時代の風潮をも研究しなければならない。そして自分の患者や、自分の親類や、世間一般の偏見と闘わなければならない。否それどころか、彼は、その人たちの利害が彼の利害と対立する人々の仕打ちに対して自分自身を守らなければならないのである。彼の医学的優秀さ

の唯一の判定者たちが、悪意ある考えからその優秀さを隠そうとしたり、あるいは低く評価しようとする人々であるということが不幸にして生ずる。ここから医学的に優れた才能や学識の必要性だけでなく、医師は世間に関する優れた感覚と知識を広範囲に共有することの必要性が生ずる。

医師に必要とされる天賦の才（genius）と才能（talents）とはこのようなものである。これらのものを十分に活用するためには、生まれながらのものであれ、獲得されたものであれ、気性や感情の一定の統制力が付け加わらなければならない。診療には突然の緊急事態が起こるし、病気はしばしば予期せぬ展開を見せ、陽気な気質と優しい心根をもった人の気持ちを動転させがちである。

この種の思いがけない出来事は、何かなされるのが適切なのかを識別することに彼を不適切にするような仕方での彼の判断力に影響するかもしれないし、あるいは、仮にそれを知覚していても、にもかかわらず彼を優柔不断にするかもしれない。けれどもそのような出来事は、極めて迅速な識別と着実に確固たる行動を必要とする。病人というものは自分の医師の中に何らかの自信の無さを発見する場合には、きわめて容易に不安を覚えるものであるからなおさらである。患者の弱さや好ましくない行動や、すべての医師が彼の診療の際に出会うに違いない数多くのちょっとした食い違いや反駁もややともすると彼の気性を混乱させ、その結果彼の判断力を曇らせ、彼をしてその場にふさわしく、適切な行動をとることを忘れさせてしまう。ここから、医師が平静さ、沈着さ、確固とした態度をとることの利点と、また彼自身の判断において彼が十分に困難を自覚している場合ですら、確固たる態度を示すことの利点が明らかになる。

【道徳的特性－他人に対する共感の心－穏やかな振る舞い－】

さて今度は医師の性格において特に求められる道徳的な特性（qualities）に言及することにする。これらの特性の中で第一のものは、他人に対する共感の心（humanity）である。これはすなわち、われわれをしてわれわれの仲間

(fellow creatures) の困窮に同情させ、その結果最も強力な仕方では我々を彼らの救済へと駆り立てるあの心の感受性 (sensibility) である。共感 (sympathy) は患者を安らかにさせるように思われる多くのちょっとした要因に対して強い気遣いを生み出す。これは金銭では決して購うことのできない気遣いである。医師を友人として持つことの言葉に表現できない安らぎはこれに由来する。共感はあるが患者の好意と信頼を引き付け、そして多くの場合これは患者の回復にとって最も重要なものである。もしその医師が穏やかな振る舞い方を、また、思いやりある心を、すなわちシェイクスピアが強調して「人間らしい思いやりのミルク」と呼ぶものを身につけているならば、患者は彼の接近を彼の救済に務める守護天使のその様子に感ずる。しかし他方で、思いやりのない、振る舞いが粗野な医師の訪問はすべて、彼の破滅を宣告しにやってくる天使の面前にいるかのように、患者の心を彼自身の中へ沈ませてしまう。さわめて同情心の強い気質を持った人々は、日々、数々の苦難の情景を目にすることで、時がたつにつれ、医療行為 (practice of physic) においてさわめて必要なそのような心の平静さとゆるぎなさを身に付ける。彼らは、憐れむべきことの中に何であれ快いものを感じ取ることができ、それをして自らを無気力にさせたりあるいは彼らから人間性を奪わせたりはしない。人間愛に由来する諸感情に無感覚な医師たちは、この同情を嘲笑し、それを偽善、あるいは、虚弱な精神のしるしだと言う。残念ながら同情がしばしば見せかけのものであることは本当である。しかしこの見せかけは簡単に見抜かれるだろう。本当の同情は決してこれ見よがしのものではない。反対に、それはむしろそれ自体を隠そうとする。しかし、この偽善をもっとも効果的に暴露するものは、医師が上流の生活をしている人々と下流の生活をしている人々に対して異なる態度をとることにある。彼に手厚く報いてくれる人々に対するのと、そうする手立てをもたない人々に対するのとの異なるふるまいである。寛大で高潔な心の持ち主は、上流の人々に対して同情を表すのに、より粗末な生活をしている

人々に対するよりも用心深くさえある。きわめて普通にそれに結び付けられる威厳を損なわせる解釈に用心するためである。思いやりのある、感じやすいところには一般に、劣った理解力と虚弱な精神が伴うという当てこすりは、有害で間違っている。優しく人間的な気性は、精神の活力と両立しないのでは全くなく、その活力のごくありふれた付随物なのであること、そして、粗野で荒々しい振舞いは一般に劣った理解力とさもない心根にともなうこと、そしてそういう振舞いはしばしば雅量と人間としての勇気を欠く人々によって、彼らの人間としての欠点を隠すために愛好されることは、経験が証明するところである。

〔柔軟性 (flexibility)〕

これまで私が述べてきた同情とは異なるが、同様に医師において好ましい良き気質 (good-humour) というものが存在する。これは一種の優しさと順応性からなり、彼が診療においてぶつかる多くの反対や失望に対して辛抱強く、快活とすら見える態度で彼をして耐えさせるものである。

もしも彼が食事療法の指示において厳格であり、またあまりにも細かければ、そのような指示は厳密には従われないことを思い知らされることもあるだろう。そしてもし彼が対応において過酷であれば、彼の方針からの逸脱は、同じように確実に彼から隠されることになるだろう。その帰結は、彼が患者の本当の状態について知らないままにされるということである。すなわち、たんに食事療法上の不規則によるものを、その病気の結果と考えることになったり、そしてまた何らかの影響をおそらくは決して服用されたことのない薬のせいだと考えることになったりする。こうした仕方では彼が導かれていくかもしれない誤りは、明々白々であり、十分には従うことのできない指示を慎重に緩めることで容易に防ぐことができるであろう。医師の患者に対する管理 (government) は、確かに絶対的なものであるべきなのかも知れないが、し

かし、絶対的な管理に従う患者はほとんどいないだろう。賢明な医師は従って、最善ではないがしかし遵守されるであろうものの中で最善である指示を処方すべきであり、種々の悪の中で最小の悪を選ぶべきなのだ。そして何があっても彼の患者の信頼を失い、患者の本当の状況について患者に欺かれるようなことになってはならないのである。今私が擁護しているこのような免責は、しかしながら、思慮分別と慎重さをもって管理されなければならない。彼自身のためだけでなく患者自身のためにも、医師は彼の患者との関係において本物の威厳と権威を強化することが何より必要なことであるからだ。

【神経を病んだ患者（nervous patients）に対してなされるべき特別の優しさ（tenderness）】

医師の温厚さと忍耐力を厳しい試練にさらす数多くの種類の患者がいる。私が言っているのは神経的な疾患に苦しむ患者たちのことである。こういった患者に対する恐怖は一般に謂れないものであるけれども、しかし彼らの苦しみは現実のものである。この病気の座はリウマチあるいは水腫（dropsy）と同じように体質（constitution）にある。患者たちの訴えを、それらを馬鹿げた想像力の結果だと想定し、あざけったり無視したりするのは、等しく残酷でもあれば馬鹿げてもいる。それらの訴えは一般に身体的な変調に起因しているか、あるいは、それを伴っているというのは、十分明らかであるが、しかし、それらの訴えを別様に想定してもなお、悩み苦しむ人々の救済のために彼にできるすべてのことをするのが、医師の義務である。

想像力の変調も身体の変調同様医師の注意の対象であることは当然である。そして確かにそれらはあらゆる悩み苦しみの中でしばしば最大のものであり、最も繊細な同情を必要とする。それらに適切に対処するためには、医師の方に熟練（address）と良識（good sense）が必要である。もし彼がそれらを軽く扱っているように、あるいは、その場にふさわしくない陽気さをもって扱って

いるように見えれば、患者は計り知れないほど傷付く。もし彼が些細な状況のすべてにあまりにも不安な様子で神経を使えば、患者はその病気を高じさせることになる。それゆえ、彼自身のためばかりでなく患者のためにも、彼は一方での怠慢と侮りと、他方での取るに足りないすべての症状に対するあまりにも大きな気遣い（solicitude）との中間を見つけ出す努力をなんとかしなければならない。時には彼は、そう意図しているように見えないように、人を楽しませ興味深い主題を気づかないように徐々に導入することによって精神をその現在の苦しみから、そしてまた未来の暗鬱な見通しから逸らせることができるかもしれない。また時には彼は細やかな思いやりのある愉快的冗談をうまく使うことができるかもしれない。

[初めて仕事を始めた時の医師の態度と、診療において確固たる地位を得た時のそれとの間にしばしばみられる対照]

時に我々は仕事をし始めた時の医師の行動と、後の評判と診療において確固たる地位を得た時の行動との間に顕著な相違を目にすることがある。最初彼は物柔らかで丁寧で思いやりがあり、彼の患者に対して心のこもった気遣いをする。しかし、後になってそのような行動の成果を手に入れてしまい、だれにも頼らずに生きていけると知ると、全く異なる雰囲気呈するようになる。彼は横柄、貪欲、無造作になり、しばしば振る舞いにおいていく分野卑になる。自らが手にした権勢を意識して、専制者のように振る舞い、人々の彼の能力に対する信頼を徹底的に利用する。

[思慮深さ、秘密保持、信義に対する責務]

医師は、彼の職業の本性により、彼が雇われている家族の内密の事情や問題を知る多くの機会を持つ。彼自身の観察から見聞できるものに加え、恐らく自分の命が彼のケアによるものと認める人たちのなんでも打ち明けられるという

関係を彼はしばしば許される。彼は人々を、社会の人々が彼らを眺める環境とはまったく異なる、極めて悪い状況の中において目にする。すなわち、苦痛と病と失意によって打ちひしがれた彼らを目にするのである。こういった屈辱的な状況の中で、いつもの快活さや穏やかな気分や活気あふれる精神のかわりに、彼は不機嫌、苛々、弱気に出会う。ここから個々人の評判や家族の名誉が時にいかに医師の思慮分別、秘密保持、信義に依存することになるかが明らかになる。秘密保持は女性に関する場合特に必須のものである。女性の人格がそれをもって取り扱われるべき特別の思いやりとは別に、いかなる点においても女性の名誉とは関係はないものの、すべての女性が、その性の生まれながらもつ傷つきやすさゆえに、どうしても秘密にしておきたい体調上のある種の事情が存在する。そしてまた、ある場合には、こういった事情を秘密にしておくことは、彼女の体調、彼女の利害関係、彼女の幸せにとって重大な結果を招きうるのである。

【節度 (temperance) と節制 (sobriety)】

節度と節制は医師によってとくに必要とされる徳である。広範囲に及ぶ診療行為の中では、記憶と判断力の最も強力な使用を要求する難しい場合が頻繁に生じる。私が耳にしているところでは、ある優れた医師たちについて、彼らは酔っているときも素面の時と同じように正しく処方したといわれている。もし仮にこのうわさに何らかの真実があったとすれば、それには自らの職業の自らの能力 (abilities) に対する厳しい非難が含まれていたのであろう。それが示していることは、彼らが機械的に診療したか、もしくは、それらに対する知識の有無が才能のある医師とそうでない医師とを大きく隔てるあの子細な検討を必要とする特有の要因には注意を向けず、より明白な症状のうちのあるものに対して処方したかのいずれかだということである。酩酊の意味することは、記憶と判断力における欠如である。それは思考の混乱、困惑、動揺を意味する。

したがってそれは、人をして彼の理解力をいきいきとかつ強力に使用することを求めるあらゆる職務に対して不適格なものにするに違いない。

〔誠実さ－誤りの指摘（conviction）に対する開かれた態度〕

私は医師に課せられる道徳的義務の一つに誠実さ（candor）を入れてもよいと考える。誠実さは彼をして説得を受け入れさせ、自らの誤りを認め、正すようにさせるからである。病気を取り扱う不成功に終わった方法に執拗に拘るのは、過度の自惚れや体系の不過謬性に対する過度の信頼のためであるに違いない。このような誤りは、それが一般に無知から生じているがゆえに治療するのがより困難である。本当の知識や明晰な識別能力は確かに人を過度の自信の欠如（diffidence）や自己卑下（humility）に導くかも知れないが、しかしそれは自惚れとは両立しないものである。また、この種の執拗さは心の欠点から生ずることも時に起こることである。そういった医師たちは自分が間違っていることを目にしても、あまりにも自尊心が強すぎて自らの誤りを認めることができない。その職業の一人から彼らに対してそれが指摘された場合には、特にそうである。この種の自尊心に、つまり、精神の真の尊厳と向上と相いれることのできない自尊心に、何千もの命が犠牲となってきたのである。

註

1. ジョン・グレゴリーの履歴の紹介および翻訳に際しては、Laurence B. McCullough の以下の2つの著作を大いに参考にした。グレゴリーを英語圏の最初の医療倫理学あるいは医学の哲学を著した人物として復活させた彼の功績は大である。
2. *John Gregory and the Invention of Professional Medical Ethics and the Profession of Medicine* (Kluwer Academic Publishers, 1998) 本書は、ジョン・グレゴリーの業績に関する本格的な研究書である。
John Gregory's Writings on Medical Ethics and Philosophy of Medicine (Kluwer Academic Publishers, 1998) 本書は、表題の通りグレゴリーの医療倫理学関係の業績を集めたものである。出版されたものはもちろん、聴講生のノート、マニュスクリプト等を忠

実に再現することに努めたものである。その他に重要なものとして、Lisbeth Haakonssen による *Medicine and Morals in the Enlightenment: John Gregory, Thomas Percival and Benjamin Rush* (Editions Rodopi B. V. ,1997) がある。

今回の翻訳では、註に関しては内容に関するものではなく、主に原語と日本語との関係にかかわるものを中心とした。註は短いものは本文内に括弧 [] に入れて付けた。また原著では各講義の最初に講義内容の索引が一括してあげられているが、それでは分かりにくいので、該当箇所の最初に括弧 [] をつけて挿入した。